



ファウスト的文化の一悲劇：
ロベルト・プレヒトルの「タイタニックの沈没」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩子, 良一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006706

ファウスト的文化の一悲劇

——ロベルト・プレヒトルの「タイタニックの沈没」——

岩 子 良 一

「鉄の娘」というのがある。別に貞操の堅固な娘の謂いなどではなくて、中世ヨーロッパにおける拷問道具の一つである。所謂外面如菩薩で、嬋娟たる美女の姿態を見せているけれども、ふくよかな胸の裏側には鋭い釘が一面に具わっていて、中に閉じこめられる罪人に地獄の苦しみを与える仕組である。否、唯にこの鉄の娘だけではない。凡そ暗黒時代といわれる中世には拷問道具が数を尽して存在し、且又肉体的拷問は時をわかつた行われ、又それは寧ろ日常茶飯的な行事といつた趣きをすら呈していたと考えることができる程である。少なくとも彼の鞭打ちの如きものは、恐らくは人の注意を牽くに至らぬ程の些事であつたらうとも想像される。たとえば、今の吾々の耳を時々刻々に襲う大都会の物懐い——吾々は最早やそれを物懐いなどとは感じなくなっているのだけれども——騒音のように。

その絶えざる騒音に包まれつつある吾々現代は最早やそれをたえ難きものとは感じない。少なくとも或る特定の瞬間、瞬間を除けば、平然としてこれを迎え、包まれている。併し若し仮りに彼の中世人をこのような大都会の十字路にほり出せば如何であろうか。恐らく彼等は、たとえ吾々現代人が中世の肉体的拷問を想像した場合に、そのおそろしさに身の毛をふるわせるが如く、彼等の神経は、言うところの近代文化のセンターを上なくおそろしい拷問の場とも感ずることである

う。彼等は摩天楼を見上げつつ、鞭で打たれた庭の片隅を寧ろ天国の如くに憧れるでもあらう。つまり、中世的な暴力の形は、今の人間から観て恐ろしいのであり、従つて又今の人間の生活様式が、幾世紀か未来に出現するであらう人々から回顧されるであらう場合に、彼等が、丁度吾々が中世に対して身慄いをするような恐ろしい影を現代の中に寧ろ必然的に見出すであらう。

言うまでもなく、これは、凡そ人間の感ずる苦痛が——必ずしも苦痛だけに限らず、広い意味に於ける感覚一般についても又同様であるのだけれども——その苦痛を受ける主体との聯関に於てでなければ正確に扣むことができないからである。ロバート・ルイ・ステイヴンソンの例に従つて、寒暖計の目盛りの上下が必ずしも具体的に感じとられる寒暑の度合と一致するものではないからである。

言うまでも無いことながら、生活は主体とそれを取巻く環境との相互作用から成り立つ。環境や客観的狀態を無視して主体乃至人間を考へるのは抽象に墮するし、又主体とのつながりをほしのままに無視して純然たる客観的狀態や条件のみを観ることも亦具體的な生活とは言い難いであらう。而して所謂近代に於ける科学の発達が、客観の分析に終始する余り、主体性との連関をともしれば見失ひ勝ちになり、かくして現代人の思考を、少なくとも或る意味に於ける抽象性へとか

りたてて行っていることは否定し難いところではないかと考えられる。凡そ人間の主体性は、従って又人間の精神は文化を作り出して行くものである。文化の終局的な目的が果して何処に在るのか、或は文化とは何と云うのであるとかといった問題は暫く措くとして、兎に角人間が精神的に動く処に於ては何等かの意味の文化が生ずるのである。言うところの文化財が出来るのである。而して、文化を生む活動が客観化されて、所謂文化財が出来るところに人間の問題の第一歩が始まるということが出来るであろう。何故なら、このように客観化された文化財は最早や人間の手や精神を離れて広い意味での環境となり、主体性としての人間の言わば対手となるに至るからである。又、このようなところから、人間とその環境との関係、つまり人間の生活は文化の進展と共に多岐を極め、複雑を増して行く結果となることは寧ろ必然な運命であろう。而して外界が複雑となつて行くにつれて、というよりは寧ろ主体を取り巻く外界が複雑化するということは、より正確には、外界と主体との関係の複雑化に他ならないのであって、このような面から観るならば、所謂近代人がその複雑な文化を作り、且自ら作り上げる外界によく堪えて、兎も角も生き続けて行きつつあることは、人間の有つ大きな可能性と馴応性の故に讃嘆されていいものである。若しも、人間の作り出す環境と人間との関係が理想的な平衡を保ち得ているものとするならば、ところが不幸にして、その関係はどのように簡単に平均を保ち得ない。という意味は、この両者の関係に於ては、所謂馴応が主体性の喪失と結びつかざるを得ないからである。自ら動いている筈の人間がいつの間にか単に動かされている或るものと墮してしまふからである。彼の中世の肉体的暴力を目して野蠻となし、近代都市の騒音を指して進歩と観るのは、極めて浅はかな外面的觀察でなければなるまい。所謂ものの面に於ける進歩と精神の面に於ける停滞とは、人間の所産を一部とする環境と人間との関係の歪みを意味す

るものであろう。

その所謂歪みの一つは——近代に於ける——人間の受動性の増加という点に求められるであろう。物の面に於ける發達は、一面に於て吾々の生活をより便宜なものにして行くと同時に、吾々の生き方を次第に受動的な態度へと馳り立てて行く。例えば彼のラジオは、吾々がこれを聴くというよりも寧ろラジオの方が吾々に——或る意味では——否応なしに聞かせるといった傾向を有つのである。ラジオを聞きながら眠るという風なことは、その一例でもあろう。否、唯にこのような狭い意味での物だけではない。広い意味でのものつまり制度一般も亦人間に対してこのような働きかけ方をするのである。人間が制度を動かすのではなくて、人間の方が制度や、その制度のかもしれない出ず、言わば物の精神によって動かされるのである。再びステイヴンソンの言葉を借りれば——腕時計をはめて威張っている人間の気が知れない。御当人は「時」を支配している算りなのかも知れないが、どこるか逆にした趣きが寧ろ随所に観られるのである。少々奇異に響くかも知れないけれども、このような傾向は一つの非精神化の現象ではなからうか。というのも、最早や精神の自主性は次第に衰退して、外と物に引きずり廻されている始末だからである。

パン無くして生きることが出来ないというのも永遠の真理であろう。併しパンのみにて生きることが出来ないということも亦同じく真理である。蓋し生きることを感じ得るものは精神に他ならないからである。何故人間に精神が与えられたかは暫く措くとして、人間の生活の中心をなすものが精神であることは否定の余地が無いであろう。そのような意味に於て、生きるとは所謂精神を生かすことに他なるまい。文化を創り、ものを生み出す営みも、所謂人間が自らの精神を生かしたという悲願なのである。ところがその悲願から出た人間の精神活動

がいつの間にか精神を生かす可き本義を忘れて、ものに引きづり廻される結果となるのである。——これは一つの倒錯的現象であらう。

何故なら、倒錯とは、或る目的を追求している内に、いつしか目標を見失つて、目的になり得べからざるものが固定觀念として人間を支配するに至ることを意味するからである。言うまでもなく、倒錯は所謂性生活にその最も明確な現われを持つ。本来の生殖即ち子孫を残すという意図や目標が逃げてしまつて、性の單なる附随的なものや、或は全く性とはかけ離れてしまつて行爲やものに興味と関心が固着するの、性的倒錯であらう。尤も或る意味では、精神と倒錯とは切り離し難い關係を有つているともいえる。というのは、人間は何処までも広い意味での自然の一部であつて、人間は如何にもがいてみても完全に自然を超えたり、離れたりするとは不可能であるのと同時に、明らかに精神は、少なくとも部分的に自然を超えたり、離れたりするからである。つまり精神は或る意味に於て自然に対立する面を有し、而もその所有者である人間は自然に包摂された存在であるからだ。自然に生きようとしながら、いつの間にか自然に反して生きるようになるからである。否、人間が生きて行くということそれ自体の内に自然に反馳して行くということも自ら含まれているといつた方がいかにも知れない。換言すれば、このことは、文化が自然に対して倒錯的な面を有たざるを得ないことを意味するであらう。而してこれは、所謂ものの文化或は文明に於て最も甚だしく顕現されているのである。彼の性的倒錯が文明の随伴現象として増大しつつある事実の如きは寧ろその一例に過ぎないと考えられるところだ。又その一般的社会生活に於ける現われとしては、近代に於ける大都會主義をあげることも出来るであらう。トーマス・マンが精神と病氣との親近性をくり返し、くり返し説いているのも亦このような意味に他なるまい。

此処に於て吾々は所謂「精神」の人間世界に於ける意義と使命につ

いて——これは同時に精神とは何ぞやという問題に帰するのであるが——のマンの見解を調べたい気持ちに襲われるのであるが、その前に吾々は「精神と極似し、而も相異なる」魂に就いて観てみよう。マンは、——魂とは、物質と同じく始源人間的なもの、つまり、初めから与えられている原理の一つであつて、だからそれは生命を有するものではあるけれども、智 (*das Wissen*) を有つていない、と言われている——という。従つて魂は元々「静けさと幸福の高き世界」に住んでいるのであるが、未だ形を為さざる物質への愛情に動かされ、迷わされて、物質と相交わり以て肉体的快樂を得んが為に形を生み出そうと強く望むのである。そしてその物質と魂の交わる場所に世界が生まれる。

ところが、物質の中にとらえられてしまつて魂を目覚めしめ、本来の世界を悟らんが為に神よりつかわされる、言わば第二の使者が精神なのだ。つまり、精神は自覚に於ける魂とは本質を一つにしなが、而も *Das Wissen* の有る無しによつて區別されるのである。言わば、魂そのものは未だ神のものであるが、精神はこの *Wissen* によつて人間のものとなるのだ。而して神乃至自然には罪、従つて罪の意識はあり得ないのであつて、所謂「罪」は人間と人間の精神の始まる場所に起るのであつて、これが言うところの原罪ではないであらうか。この意味に於て、*La nature ne connaît pas le vice. C'est l'education ani l'a inventé.* というカシユ・モークレルの言葉は正しいであらう。まことに知は罪を予想することなしには考えられないであらう。ところが、罪と同時に与えられている知は、罪の克服へも導かれる知でもある。所謂「魂をもとに連れ戻す為」に派遣されたものである。而して、連れ戻されるということは、精神が精神本然の姿の自覚することをも意味するであらう。極言すれば、精神は罪を作り、且その罪を自ら克服して行くのである。否、そのような過程そのものが精神の生活といつてもいいかも知れない。而して、そのような

過程を永遠の袋地だと観れば、其処に「絶望」が生まれるであろうし、「魂」の世界への超越的復帰を信ずれば、其処に「救い」が生まれるのである。

人間の精神の有つ罪の作製とその克服という二重作用は、所謂憎悪と愛の問題にも通ずる。若し精神即罪の意識ということが成り立つとすれば、憎悪も亦極めて根元的なものと観ざるを得ないであろう。人間が精神を具え、個別の觀念が生ずると同時に、憎悪ということも亦必然的に発生せざるを得ないものであろう。というのも、人間が肉体を具備し、その肉体的快楽を通じて人類の発展を期す可く運命づけられている以上、自己の快楽をこぼむ総てのものへの憎悪は自己への愛と寧ろ同時に与えられるより他はないからである。生、つまり快よく生きるということを中心として考える以上は、その快よく生きることを妨げるものへの憎悪は必須なものだからである。(シュテューケル) このような訳で、所謂愛と憎悪は言わば精神の両極性であって、本質的に相異なるものでは決してない。表と裏の關係というか、或は一つのもの、唯方向を異にするだけというか、兎に角一方が神のものであり、他方は悪魔のものであるという風な事情ではなからう。言い換えれば、このような意味で考えられている神はその裏面に悪魔を持つと言っても差し支えないのである。

これを、所謂「快」と最も密接な人間の性生活の面から観て行くと如何であろうか。というのも、人間の生活から、所謂生きる欲び、肉体的感覚の快楽はこれを取り除いて考えることは出来ず、その快楽とよるこびを通じて人間の繁盛を示すことは何と云っても現世の、従って生物的自然の目的であるからだ。このような訳で、人間の精神は少なくともその拠りどころとして所謂「性」に根を下していることも否定し難いところであろう。何と云っても性が生の基盤をなしていることは厳然たる事実であるからだ。尤も生の基盤をかたち作る性はいろいろ

の変形や昇華作用を経ることも亦否定し難い事実である。而して吾々が若し仮りに人間の生活、従ってその精神生活を性生活との連関にまでさかのぼって考える場合には、その所謂性生活の昇華と抑圧ということが大きくクローズアップされるのである。(フロイト、シュテューケル) 何故なら、精神が具体的に動いたり、顕現したりすることは心理作用に他ならないからだ。実際には、性生活に基づいていても、その昇華作用を経たものだけを精神乃至は精神的なものと呼ばれているのであるけれども、これは言わば狭い意味に解釈された精神という風にも言えるであろう。何故なら、凡そ人間の生きるころ、凡そ如何なる形であれ、精神はたえずくっついてくるものだから。勿論、ここにいう精神とは、従って凡そ生や、生の営み一般を意識するものといった程の意味である。

このように観てみると、精神は一方に於て、その言葉に於ける最も広い意味での快を求める極を有ち、他方に於ては罪の意識を極とする、という風に考えることが出来る。或は、人間の精神は、快を追う心と罪の自覚との間を行き交いつつあると言っても良いであろう。罪の自覚に立って、専ら贖罪レトリック的生活に生きる聖者にも、贖罪レトリック的生そのものを快とする気持はこれを否定出来ないであろう——逆に又罪の意識を全然持たぬ悪人という風なものも考えることは出来ないであろう。所謂、善人も亦救われる、いわんや悪人をや、はこのような意味で真実であるであろう。たとえば中世の僧が悔罪の為に自らを鞭打つような場合、筆者は必ずしも彼の性科学者のシュテューケルなどが指摘する如きアルゴラグニーと結びつけることには賛成しないけれども——と言つても、苦痛快楽的な要素と直結している場合が決して無いというのではなく、それは特殊な場合に限られると考えるからであるが——客観的に観られる所謂悔罪の行為や苦行なるものは、その行為の主体者からすると、それが寧ろ止むにやまれぬところから出ているという

点からでもその一端が想像し得る如く、それは最早や純粹なる苦ではなくて、その何処かに快の影をやどすものに相違ないのである。言わば自己を破滅におとし入れて、或はマンの表現を借りれば、ものに捕われの身となりながら、そのような自らを救い出して行くというのが精神の動きに他なるまい。嘗てヘルマン・ヘッセは、「智識人は廻り道をする」と述べたことがあるが、この言葉も亦このような意味に解釈されるのである。尤も、ここにいう「精神」とは、理性も感情も、更らには所謂本能的な働きまで含めた、極めて広い意味の精神作用一般を指していることは注意されなければならないのであって、精神は或る場合には逆に極めて狭い意味に限定して用いられることもある。例えば、肉体や感覚に対立せしめての精神といった風に。そしてそのような場合、精神の最も純粹な現われとして、トーマス・マンやその他の人々に於ても観られるように、思惟ということが持ち出されるのであるが、普通に言われる思惟乃至思考は、精神というものが狭い意味に解釈されるという意味で抽象的色彩を帯びるのである。部分的な感じを受けるのである。このことは、所謂思惟が、意識の上へのぼった思考乃至は明確な言語の形態をとった思考——それが實際口を通して語られるとか書かれるとかは別問題として——に限定されるからであるが、彼のフロイト、シュテューケル等の精神分析学者が、単に意識の世界に止まらないで、意識下の世界にまで突入したことは、何と云っても人間精神の研究分野を拓め且深めたものと言うことができるであろう。殊にシュテューケルの所謂「思惟の多音性」は注目し得る。人間の思惟は純一無雜なものではなくて、寧ろ逆に多くの層や面から成り立つものであり、言語的な形を具えて明確な思惟となるのは、その多くの中の一つに過ぎないものであり、且又その一つが、他を抑えて表面に出る前には、思惟の各層の間に激しい闘争が行われるものであるとの結論は極めて示唆に富むと言わねばなるまい。彼のヘルマン・ヘッ

セが「曠野の狼」の中で、この思惟の多元性を具象的に描いているのも、このようなところから出てくるものと解釈されるのである。従って、思惟も亦、例えば現実の人間の世界の如き複雑極まる一つの世界を構成するものと観る可きであろう。詢に「精神」は一つの世界であると言われるのは、このような意味でなければならぬ。

従って、精神の生活はそれ自らの内に闘争的なものを抱擁しているのである。表面に現われる精神的行為だけを観れば單純なような印象を与える場合に於ても、その以前には所謂「多音」間の闘争が在るのである。(シュテューケル) そして、その多音の中の一つが言わば他に打ち勝って、明確な形をとったり、表面に現われたりするのである。このことは、換言すれば、表面に現われる精神生活の裏づけとして寧ろ必ず意識下に抑圧された精神生活が在るといふことにもなるであろう。且そのような精神生活の世界にメスを入れようとするのが彼の精神分析に他なるまい。

人間の精神生活が本能的欲求と不可離の關係に在ることは、所詮人間が自然的存在であることからしても否定し難いところである。ところがその半面に人間は又その精神によって局限された意味ではあつても自然を越えて、つまり文化的に進んで行くことも亦事實である。いとところの自然そのままでは止まらないというか、或は止まることが出来ないという可きか、兎に角、永遠の進歩を目指すものも、彼のルソーの如く自然にかえれというものも、等しく自然のままでは安住し得ないことを余りにも雄弁に物語るものであるう、そのような意味で、人間の精神はたえず、昇華と、昇華に伴う抑圧といった動きを為し続けているのである。そして、昇華の一つの極端に吾々は所謂、聖又は聖者を観、その言わばマイナスの極端に變体或は變質者を観ることが出来るのである。という意味は、聖も亦變質乃至は「病氣」と必ずしも無縁のものではないということに他ならないのだ。前者は元より以て尚し

とされるところだけでも、その半面に非人間的という批難を免れ難いような場合も屢々あり得るし、後者も亦必ずしも同情、共感の余地無きにしもあらずといった場合が多いのもこのような理由からであろう。

人間がこの世に生きる限りは、人間らしく生きることが理想であろう。併し同時に人間は、それが良い意味であれ、悪い意味であれ、人間性を超えようとしたり、或は離脱しようとする傾向をも必然的に併せ持つのである。人間が神とけだものの間を行ったり来たりすると言われる所以である。

若し人間が言うところの本能を克服して行って、所謂精神的に高まって行くという半面に、人間本然的なものを次第に喪失して、非人間的なものに墮して行かざるを得ないとするのならば、乃至はそのように感ずるとするならば、そこに彼のリヒテンベルク的な絶望が生まれるであろうし、若しそのような一見袋地に永遠の魂と従ってその魂を包む神の恵みを尚び且感じ得るとするならば、其処には又何と云って生最大の神秘である「信」が生まれてくるのである。

トーマス・マンは嘗て、——私は所謂「信」よりも「慈悲」を信ずるものである。而もその「慈悲」は信仰なくしても成り立ち得るものだ——と述べたことがあるが、筆者も亦これに強く賛意を表するものである。

尤も筆者にとってはマンの所謂慈悲は同時に「生」乃至は「調和」といった言葉でも置き換えることが出来るのではないかとも思われる。というよりは、主体と客体との合一するところ、つまりここに言う「調和」こそ慈悲や恵みの、従って又人間の生の窮極をつかさどる「信」の場であろうと考えられるのである。

「酔える者のみに神は宿る」という言葉がある。酔っぱらいという

ことは、或る意味に於て精神を止揚することにもなる。少なくともその瞬間々に精神的に死ぬことを意味すると言ってもいいかも知れない。若し其処に純一無雑な状態が在り、従って又神があるとすれば、人間は「死」の状態にならなければ、そのような純一さは味わえないことにもなる。彼の愛と死の親近性と其の法悦の説かれるのも詢に故無しとしない。併しそれは最早や生の世界ではない。人間がこの世に生を受けた以上、生きる立場は何と言っても之を無視することは出来ないであろう。

罪は精神と共に始まる。酔って精神の外に出るということは、罪の意識を、従って又罪を忘れることを意味する。而して精神の外に出ることとは人間的な一つの死に他ならないことにもなる以上、人間は常に生と死の限界を歩いているものとも言えることが出来るであろう。このような観点からすれば、人間が真に精神的に生きることは、同時に死と生きるというか、或は生と死の調和に生きることになるのではなからうか。そして死を生きるという風な言い方が奇を好むものであるならば、人間は精神の精髓とも言ふ可き魂によつてよく死を克服すると言つてもいいであろう。

人間の生と、従って又人間の精神の両極性が否定し難いところである以上、所謂神と悪魔の誕生も亦寧ろ当然であるであろう。尤もこの場合に於ける神とは悪魔に対峙するものであるから、いわば善魔といったようなものになるであろうけれども、而して人間の発展つまり精神的発達、このような外存的な神や悪魔から次第に内存的なものへと移動しつつあると観ることが出来る。換言すれば、形のある存在から次第に無形のものとなつてきているのである。そして、これが旧くはキリスト教的な、人間と神との契約説であり、更らに進んでは、例えばマンなどの言う、神と人間との協同作用であり、更らには人間の魂の神性的自覚ということになるのではなからうか。

ロベルト・プレヒトルが「タイタニック号の沈没」を通じて述べている宗教性もほぼこのようであろうかと解釈されるのである。元来プレヒトルがこの小説を書き出した所以のものは、タイタニックの沈没という事件が、「歴史的且象徴的出来事」として彼の目に写ったからであり、彼はこのタイタニックに於て所謂「西歐的文明」の思い上りの末路を象徴的に画こうとしたのであった。

そのようなところから彼の小説は、五万噸を越える偉容を誇る豪華船タイタニックと、渺たる三本マストの帆を大西洋の真中に浮べるエリザベス号との所謂「出会う」-Begegnung-で以て始まる。所謂 *das Du* に対して *das Ich* を確立する機縁としての出合いは、彼のダンテとベアトリーチェのそれは言わずもがな、ヘッベルの描くジークフリートとクリムヒルトの出合い、ロマン・ローランのクリストフとグラチアの出合い、更らには、リウ・ウオレスのベン・ハーとキリストの出合い等、アト、ランダムに数え上げても、読む者をして襟を正さしめる程の美しい描写は必ずしも之を少なしとはしないのであるけれども、プレヒトルの二つの船の出合いの場面も亦、それが限り無い大洋の真中であり、一つは所謂板子一枚下は地獄という木造船、一つは新時代を象徴しつつ、荒海を脚下に征服したというか、征服し得たと信ずる程の思い上りに却って吾れを忘れていた鋼鉄船の出合いであるところから、たとえ彼のダビデとゴリアテの出合いをも何処かに思い起こさせながら、この上なく巧みに描き出されているのである。

ウォルター・ロードの報告や写真によると、豪華を極めた船室はもとよりのこと、或は英国風の酒場、或はフランス風のキャフネー、ショッピング、ストリートを形成する寶石店やその他諸々の贅沢な品を並べた店々、足が埋まるような絨緞を敷きつめた社交の広間といった客を欲ばす設備を誇るだけに止まらず、その機関や構造もテクニクの粋を尽して、これ又ロードの伝える図面によると、十六を数える隔壁設

備を具えて、たとえ船の外壁に損傷が起きても、二重、三重にそれを防ぎ得る、この上なく安全を期した仕組になっていて、-God himself could not sink this ship-(Lord) という流行が生まれた程であった。——尤も後に判明したところによると、客を娯しませる設備の為に、たとえば救助艇の数が船客数に比して少な過ぎて、その為タイタニックが沈没したのは波の静かな日であったにも拘らず多数の犠牲者を出す始末になるといったような無理もあつただけども——一言で尽せば、それは新しい時代と世界を象徴するところの、船というよりは寧ろ海のホテルである。

その海のホテルに集う人々は、旧い世界のエリザベス号を見下しつつ、或は旧きを笑い、或は新しきを讃め、一人の画家はこれを新時代の象徴として芸術の世界にとらえようとする。その時、エアラングの比較宗教学の一教授の声としてプレヒトルは次の如き感慨を述べるのである。——人間が自然の脅威に対して自己を守ろうとするのは当然な権利であろう。従つてこのような意味に於ては、テクニクも亦宇宙の理念に適うものであろう。併し、総ゆる職業(仕事)は、——ここにいう職業とは、言うことをきこうとしない自然力を人間の生活に役立つように克服することに他ならないのだが——その独自の威厳を有つているのであつて、これは、吾々が「魂」を害うことを欲せざる限り、失われてはならないものなのだ。百姓が、夏をいとわず、冬を嫌うことなく、土をたがやかし、種を播き、祈りをこめてからだを労することなく、そのようなわずらわしい仕事を一切魂の無い機械で以ってやつてのけるのとは、それは最早や単なる経済的相違ではないのであつて、「魂」の相違になるのだ。否畑の仕事だけではない。海の職業も亦同様であつて、自然力との闘い、窮乏の生活、死と危険を常に身近に感ずること、これがその威厳の印なのである。而して、この英雄的な色と味が海の人の職業に、安全な陸上のそれに比して優位を与

えていたのだ。兎に角、危険であれ、仕事であれ、人間は全てを賭してかからねばならぬ。天国を追放されて以来、汗と労苦の中に生きぬくことが人間の運命なのだ。

さればプレストルは、凡そ伝統的な習俗——*Brauchtum*——に捕らう可からざる人間的損失を觀、帆船の没落、最後の農夫——未だ近代のファーマー化しない——の死に、世界の、従つて又人間精神の貧困化を觀るのであるが、先きにも述べた如く、彼は必ずしも近代的テクニクそのものを呪詛するのではない。人間の外に在つて、或は吾々人間と調和し、或は矛盾する力の存在を忘れないこと——これを彼は *Berufströmigkeit* と呼ぶのであるが——これを彼は強調するのである。これを忘れる時、人間は神を失う。そしてヒプリス、思い上りが生まれてくるのである。人間の思い上りは必ずしも機械文明の所産でもないが、唯機械はこの人間的思い上りを助長し易いものであることは否定し難い。而して機械も亦一種のデーモンなのであつて、人間がその中に置かれているところの環境的自然に内在する如き力を具えているのである。若しその力が、人間を低い意味の労苦から、より高い労苦へと解放し、——というのは、労苦の道は所詮人間に課せられた最初にして最後の道なだから——かくすることによつて人間の高い目的に役立つといった方向に進む時、それは人間と相和して働くのであるが、その力が人間を圧倒してしまふ時には、人間は自らが使用す可き力の奴隷となり、いわば唯 *Demut* の奴隷性を *Hochmut* のそれに代えるに過ぎないこととなり、かくして本来の責務にそむくことともなるのである。

そのような訳で、プレヒトルはタイタニックを人間のヒプリスの象徴と觀る。そして、人間が海の脅威を受けない為のテクニクは元より可であり、塩漬の豚肉や茶豆ばかりといった粗末な食事の追放も佳かるうし、更らには明るい電灯の下で雑誌をたのしみ得る設備も結構

ではあろう、併しガラス張りのエレヴェーターが走り廻り、リウ、ドラ、ペーに於けるが如き宝石商や花屋が、世界の珍味と共に客を待つといったことは、これは最早や行き過ぎであり「船」という様式を破るものであり、若し神学的表現を借りるとするならば、それはそのまま聖なる精神に対する罪でなければならぬ、と主張するのである。

尤も当時、即ち第一次大戦を巡る頃は、ヨーロッパにとつて所謂「アメリカ」が一つの問題であつた。嘗てヨーロッパから移り住んだ人々の築き上げた新しい世界が、良い意味であれ、悪い意味であれ、旧いヨーロッパに新しい刺戟と影響を与えつつあつた。所謂彼の理想主義哲学に対する功利主義的哲学といった上層面の対立は暫く措くとしても、凡そ生活意識や、生活の態度そのものの上に於てアメリカは少なくともヨーロッパの知識人にとつて一つの大きな問題を投げかけていたのであつた。

抑々この小説は「タイタン族の没落」とい題名の下に公けにされたのであるが、彼のいうタイタン族とは財界の巨頭連珠にアメリカのそれを念頭に置いてのことであつて、されば彼がヤコブ・アストアを——アストア夫妻はロードの伝えるタイタニック号船客名簿にのつていたのであつて、且又夫妻がタイタニック号船客名簿にのつてゐるところの写真なども残つていたのであるが——その主人公の一人として選んだこともまことに故無しとしない。そのような訳で、プレヒトルはタイタニックとエリザベスの出会いを描いた後に、所謂ジグフェルド戦争と題して、ジョン・ヤコブ・アストアを登場せしめるのである。

このジグフェルド戦争のエピソードは、嘗てハイデルベルク近傍のワルトドルフからマンハッタンに移り住んだアストア家の商法たる土地の投機ぶりを描き、最後に主人公ジョン・アストアが当時の興業界に出現した感星のジグフェルドを相手として、所謂ジグフェ

ルド、ブームを巧みに利用して、土地と住居と娯楽興業の一大コンツェルを作り上げる経過を面白く物語るのであるが、金を巡っての企業態はここに至ると——プレヒトルは述べるのだが——最早や儲けの金額ではなく、寧ろ「名譽」の問題となるのであった。つまり商談の相手の申出をそのまま受け取れば、この商談の成立は一つの立派な平和の締結にひとしいものであり、そこには勝者も無ければ敗者もないのだけれども、正にそのようなことがアストアには気に入らないのだ。対手にこちらの要求の七百万弗の追加を嫌が応でも認めさせること、これは対手側の降伏への告白を意味するものであって、そのような勝利の確証、彼はこれを掴み取ったのだ。

そして彼の勝利への慾望は更らに進んで、タイタニック号所属のホワイト・スター船会社の株の買占めとなる。絶対多数を独占して、土地の王者たるは愚か、海洋をも吾が傘下にひれ伏せしめようとする。

——古いヨーロッパの人々は勝れた理念、伝統、徹底性否天才的閃きをも有し、而も物事を巧みに始めて行く。ところが、彼等は途中で立ち止ってしまうのである。彼等には、新しい世界のアメリカが吹き込むような、大きさをねらう魂が欠けているのだ。従って彼等は真実の意味の力の持主ではなく、「金の將軍」でもない。凡そヨーロッパの企業は、今日投資して明後日には早やその配当をあてにするといった株主への顧慮の為に身動きもならない状態なのだ。俺はアストアの金と勇氣をあげて、そのヨーロッパの尻を押してやるのだ。——これがアストアの感慨であり、それはヨーロッパ的な市民性の打破の一種の現われでもある。

そしてその市民性の打破という点に於て、彼は又一種の芸術性にも近づく。新しく得た音楽家の妻ヘリア——作者はこの女性の内に古いヨーロッパの精髓を盛ろうとするのであるが——も亦、彼の中に芸術性を観るが故に、実業家と音楽家といった相違を越えて彼を愛するに

至る。——あなたは最早や実業家などではなく、芸術家なのです。あなたは、或る事業の幻想図を描いて、その幻想を実現しようとなさるのです。人が色彩や音でもってするように、あなたは人間と物という形で作り上げて行くのです。事業そのものに、あなたは全力と情熱の限りを尽して、つまり自我を残りなく向けるのですから。——ヘリアは彼をこのように観る。

つまりアストアの内には極端な功利主義と又極端な理想主義とが相共に潜んでいるのであるが、抑々理想主義といい、或は功利主義というも、たとえば彼のロマンテシズムと即実主義的氣持と同じく、何れも人間の精神の一面であつて、さればアストアの内はこの二つの傾向が併せ存しても別に不思議はないのだけれども、彼の理想主義的態度はことに當っている言わば瞬間々々であつて、それを過ぎると彼は常に目的に、現世的な、余りにも現世的な目的に寧ろかり立てられて止むことを知らないのである。

たとえ、ヘリアの目には自分が自己の総てを没頭せしめていたと見えても、吾々アストア家のかち得たものは、自己の力に依るものではなく、町が大きくなり、国が成長し、たまたまニューヨークが新しい世界の中心点を形作るようになったお蔭であり、自分達はたとえ旧い世界の君主達が租税を課した如くに、庶民から税をしほり上げただけではなかつたのか。而も、昔の君主達は少なくとも国を守り、伽藍を作り、芸術を保護したりしてきたのだが、吾々は果して何を為したというのか。吾々は王侯の如き生活はやって来たが、王侯のような行為はしたことがなかつた。權力を獲得したのは、更らにより強い權力を得んが為のみであつて、天与の權力 (Machtamt) を守つたのではなかつた。一言で尽せば、吾々 Medici ではなくして、唯メデチーの役を演じて来たに過ぎない。たとえば、ホワイト・スターの買収も亦、結局は金儲けになるのではないか。吾々の手にかかれば、凡そ総てが

金に化してしまふ。家作も、工場も金になってしまふ。つまり現実的なものが非現実的なものへ、本質が外観へとなってしまうのだ。

かくして、夜ひとり甲板に立つ、ジョン・アストアに、船首の切る水音は、絶望と、苦惱と激怒の声の如くに聞えるのであるが、その時突然彼は不思議な平安と信頼の念に襲われる。これまでの彼にとって、天も地も海も、自己がそれを背景として悲喜劇を演ずる劇場のクリッセと感ぜられていたのだが、星空の下にひとり立つ今、これまでの巨人の如く感ぜられていた自己は消えて、無限の中の塵屑の、更らにその塵屑の如き自己を明確に感ずる。併しその自己の微少さの自覚と、よって以って起る空虚感、これまでの空虚感や孤独さと全く違っていることをも同時に感ずるのである。

その夜彼はヘリアとの抱擁に全き愛を感ずる。——ダヌンチオやトーマス・マンの死と愛のモチーフを吾々は又此処に於ても見るのであるが——而して、彼岸からの呼び声、彼が嘗てその中から迷える旅人として出て来た「時の胎内」からの呼び声を聞く。——事実、タイタニックの建造と処女航海をめぐって、モリソン船長の星占をはじめとし、神霊学誌 (Occult Review) の予言、更らにはモーガン・ロバートソンの物語る予言的夢といったように、神秘主義的な世界からは、いろいろなことが言われていて、プレヒトルも、所謂「霊」を信ずる気持から、その多くをとり入れていた。尤も、彼のタイタニック号に関する調査のやり方は悉細を極めていて、従つてたとえば機関室の描写なども真を髣髴せしめるものがあるが、それでも人やものの中にひそむ^{フェイセン}靈性への信は動かないようだ。而して、そのようなところから、先述の「天職的乃至職業の威厳性」といったような観方が出ているのである。されば、プレヒトルに言わせると、科学やテクニクは靈性を抹殺して行く可きもの——此処に彼は人間的ヒプリスを観ているのであつて——ではなくて、寧ろその靈性をつきつめて行き、又その靈性

に理解の頭を謙虚に下げて行かなければならないのだ。たとえば、所謂近代科学の一つの特性と目され得るところのスピードの問題がある。生産にしろ、運輸にしろ——彼の目的を離れたスपोर्टに於けるスピードの関心も亦このような面の特異な現われ方にならないのだが——スピードの問題は余りにも誇張され過ぎている嫌いが無いとは言えない。宛もどちらが先きに墓場へ馳けつくかと競っているかのよう。

タイタニック号も亦スピードの野心をもっていた。大西洋を最短時間でよこぎる船は、所謂「青いリボン」のペナントを獲得する名誉を得るのである。而もそれを処女航海で勝ち得ることができるとすれば……という訳で、流水の危険を告げるニュースが入って来たにも拘わらず、タイタニックはより短い北の船路を敢てとる。そして其処に破壊の第一歩が始まることになるのであるが、プレヒトルは、ここにホワイト・スター船会社専務の Bruce Ismay と、一等船員 Murdock 実名は William Murdoch をからませて、宣伝や財政的野心が技術の世界を如何に誘惑し且悪用しつつあるかという面をきびしく描き出している。つまり、人類をより幸福に導き、その福祉を増進す可き使命を有つテクニクが、人間的思の上りと邪心の為に何時の間にかまるで逆に動き出してしまい、やがては人類を破壊に誘う恐れのある点を彼は強調するのである。言い換えると、人間のヒプリスが、野心や邪心の姿となつて、人間を泥沼へ引きづつて行くと、彼は観ているのである。

先きにも述べた如く、タイタニックは現代文化の縮図を残りなく乗せて走る豪華船である。さまざまな人種、従つて又いろいろな宗教をもった人間達、風俗、習慣を異にし、生活様式を異にする人々が数を尽してこの船に乗っている。「青いダイア」を巡つての、ユダヤの宝玉商ハレヴィーや、神秘的な支那人、ヨーロッパ芸術の世界からその

ままぬけて出て来たようなヘリア夫人、船のボーイと情事を娛しむアデルホルト夫人等、所謂一流の豪商達——この船ではタイタン族と呼ばれていたのであるが——を除いても、詢に興味のある人物が巧みに描き出されているのであるが、中でも、いよいよ船が沈没して、先ず女、子供達が救助艇に移されようとする時、老いた夫をひとり残すにしのびずして、一度ボートに乗りながら、再び船にとって返したユダヤの女性シュトラウスの姿、その夫人と共にオーソドックスなユダヤ的信仰を貫いて静かに死を待つベンジャミン・シュトラウス——実名はイジドール・シュトラウスだが——を描いたところは全巻の中でも出色のものとす可きであろう。

唯にシュトラウス夫妻だけではなく、この船には尚カナダへ募金に渡る英国の牧師や、支那の密教の信者なども乗り合わせていて、作者はそれ等を色彩面白く描き分けていて、それがこの作の一つの特徴を成しているのだけれども、ここからも亦プレヒトルの現代文化の一極としての宗教の問題に対する批判・態度をうかがうことが出来る。タイタニック号が氷山に衝突した時、破局的混乱を避ける為に船長の指図で乗客を一堂に集めて、有名なイタリーの歌手の歌をきかせようとする。その時、英国の牧師は——このような危窮に際して神に祈りを捧げること忘れ、感覚を誘惑して、人間を神から遠ざける世俗的音楽に耳を借そうとするが如きは、もつての外のことだ。呪われた道をいとわざる者はアストアに従って音楽を聴け、救いを求むる者は吾れに従え、と叫ぶ。

大抵の場合、深い意味での信念や態度の問題ともなると、巧みにごまかして過して来た人達は——広い意味に於て所謂市民階級——今やのっぴきならぬ決断の前に立たされる。——これが普通の場合であって、問題が単にイタリーのテナーを聴くか、牧師の教えをとるかかを巡つてのことであつたら、人々は恐らく教えの方を選んだでもあ

う。何故なら、彼等は何れも立派な（市民的な意味の）基督教徒だったのだから。たとえ船が氷山に衝突した今、直ちに命にかかわる程の危険が身に迫っているとは感じていなかったとしても。ところが、——危窮に迫つて神にすがらうような卑怯な真似は御免だ、勇氣のある者は吾に従つて音楽を聴けと叫ぶアストアと、余りにも激越な牧師との衝突の為に、問題はいつしかずれてしまつて、勇か怯かという面に移つた。すると、反逆的、タイタニック的な血が、裝飾的な基督教精神を押し流してしまつたのであつた。尤も少数の人々はそれでも牧師に従つたのではあるけれども、牧師が罪の悔い改めと共に現実的な救いを約束すると、彼等の所謂宗教心は現実的に生命が助かることや、従つてそれに結びつく利益への関心と化して行く始末である。つまりプレヒトルはこの場面で、宗教本然の姿——シュトラウス夫妻——と現代に於ける現象としての宗教とを明確にコントラストさせて描き出すものである。

タイタニック遭難者を救助したのは、カルパチア号であつただけけれども、作者はこの船の船長ロストロンの姿を借りて、再び現代に於ける宗教の問題と、彼の所謂「天職の威嚴」*Berufswürde*の問題にふれる。彼は近代的テクニクを身につけた人間だけれども、古い型の船長であつて、されば古い習慣にのっとり、航海中も「礼拝」をとり行うのであるのが、——凡そ戦場と海では宗教家の要はない。自由な大空の下の神は書齋の中の神とは自ら異なるのだ。私の船にはいつも十に余る程の異つた信仰をもつ人々が乗っているが、その人達の為にそれぞれ牧師や坊さんやラビナを備うような真似はできたものではなからう——というような訳で、常に彼自らが司祭をやるのである。そのロストロン船長は船員や救助された人々を甲板に集めて語る。——タイタニック号の不幸は今更らに、吾々人間がどのように額に汗して働き、頭をひねつてみても、尚吾々よりもより強い何か吾々の

前に立っていることを示す。つまり、人間の意志は一つの運命といったものの中に包みこまれていて、而もその運命の意志と目標は、人間にとつて永遠の秘密なのだ。尤も、だからといって、吾々は勇気を失つてはならないのは申す迄もないことだ。それは、吾々の行為や企画も亦、ここにいう運命の一角を形作るものであり、又それは吾々に課せられた義務でもあるからだ。併し吾々はこのように顧ることによつて謙虚な心を学びとらねばならぬ。たとえ吾々の行動がどのように成果をおさめようとも、それは未だ吾々の思い上りを正当づけるものではない。……凡そ生ける者も死せる者も、それにとつては生も死も所詮は象徴に過ぎないところのより、高い力の胎内に包まれているのだ。そしてこの力を人はいろいろな名で呼び、いろいろな形で観、又いろいろな方式で崇めているのだ。……この力は怒りでもなく、慈悲でもなく、酬うことをせず、罰しめせず、この力の前には総てのものが等しく、従つて愛に値するものも憎悪に値するものも無い。吾々はこの力を把握することはできず、それに就いて人に語ることもできぬ。併し、たとえば今のような瞬間瞬間に吾々は、吾々自らのなかにその力がひそみ、吾々は又その力の中に在ることを予感する。この力こそ吾々を囲み、吾々人間を通じて働く運命なのであって、吾々は凡そ微少極まる人間であるに過ぎないけれども、同時に吾々は或る偉大なものに参与しているものもある。而してその偉大なるものに値するものたらんとすることが人間の責務なのだ、と。——このロストフ船長の姿に、作者プレヒトルは、近代人の意識の一角を強く流れている、個人的体験としての宗教性をうたい出しているのである。

後記 筆者は嘗て書いた「ベルゲングリーンの位置」と題する小論に於て、ロベルト・プレヒトルのことに就いて簡単に触れたことがあった。そのプレヒトルは余り読まれていないが故に、先の小論に於ける言葉を敷衍する意味でこの一文を草したのである。

Lit.

R. Prechtl : Der Untergang der Titanic

W. Lord : A night to remember
etc.